私が通った幼稚園・保育園(15)

「後の日のために」

―昭和十九年三月卒業　池の組―

坂本　起一

私が初めて東京女子高等師範学校附属幼稚園に行ったのは、昭和十六年の秋か、翌年の春だったと思う。私たち一家は、小石川区林町に家が建ったので、十六年の四月にその家に越してきた。そして、間もなく両親から、キイチも大きくなったから幼稚園へ行くのだと言いきかされ、幼稚園に入るには試験があって、先生に「あなたのおなまえは」ときかれたら、「なんとお答えするの」などと言われたりし始めた。

やがて、その日がきて母に伴われて幼稚園に向かった。今も変わらない正門を入り、大きな樹が植えられたロータリーのある大学の校舎に突き当

たって左に折れると、その先に茶色いレンガ建ての幼稚園があった。あの時、母と手をつないで歩きながら、右手に聳える大学の校舎が、威圧する要塞のように思えた。私はとても緊張していた。今から考えると、母も相当緊張していたに違いない。

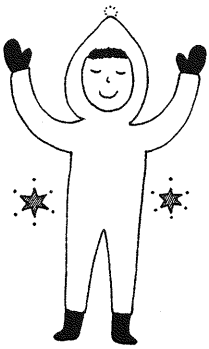
幼稚園の校舎に着いて玄関を入ると、床がぴかぴかに磨かれた廊下が真直ぐにのびていて、一番奥に大きな部屋があった。その部屋に入ると、右手に一段高い所があって、そこに子どもたちを前にして保護者が並んだ。何人かの先生がいらっしゃったが、そのお一人が「これからピアノの音楽が始まったら。子どもたちはお部屋の真ん中の方に進んでください」とおっしゃった。そこには、なわとびの縄や、大きな積み木などで半円形のコースができていた。そして、子どもは、一人ずつピアノに合わせてスキップをしながらそのコースを辿って帰ってくるようにと言われた。後に附属小学校の音楽の先生になられた福田先生がピアノを弾いておられた。

さて、ピアノが鳴り出して子どもたちは前に進んだ。私も一緒に進んだ。ところが、ふと私が振り返って母の方を見ると、母がハンカチを目に当てているのが見えた。とたんに悲しくなって、私は泣き出してしまった。母のところへ戻ってしまい、母や先生方がなだめても泣き止まなかった。コースをスキップでまわるなど、どうしてもいやだと言い張った。そして、とうとう他の子どもたちは全員テストを終えて帰ってしまったのに、私だけが取り残された。

すると、先生方がニコニコしながら、「さあ、やってごらんなさい」「できるでしょう」とすす

めてくださった。やっと落ち着きを取り戻した私は、ピアノに合わせて両手を拡げブーンと飛行機のまねをしてコースをまわった。「ほーらできるじゃありませんか」と先生方に笑われた。この後、眼鏡をかけた優しそうな男の先生、幼稚園主事の倉橋惣三先生に、「あなたのおなまえは？」ときかれる口頭試問があって終わりだった。

家に帰ってから、「今日は大失敗をした」と母が言っていた。私があんなに泣いてしまったのだから、落ちたと思ったのだ。だが、叱られたりしなかった。「私が涙を拭いたりして悪かった」と母は言っていた。幼稚園の入園試験の場で、親が涙ぐんでしまっては困るのだけれど、十七歳で私を生んだ母には、いろいろと言うに言えない苦労があって、子どもがやっと幼稚園に行く歳になったことへの感慨が目頭を熱くさせたのだった。



なかばあきらめていたが、入園を許された。両親、特に母は大変喜んだ。そして、毎日の送り迎えが始まった。

お昼のお弁当を入れたバスケットを提げて、母と一緒に幼稚園に通った。クラスは林の組。担任は上遠文子先生だった。先生は丸い眼鏡をかけた優しい先生で、私は大好きだった。

私は同じ年頃の子どもたちと遊んだことが無く、何時も大人にかこまれて暮らしていたため、元気のよい男の子が走り寄ってきたりすると、怯えて上遠先生にしがみつくことがよくあった。そ

れでも、幼稚園に行くのは決して嫌ではなかった。お砂場で山をつくり、トンネルを掘ったり、折り紙をしたり、クレヨンでお絵かきをしたり、テストの時に泣いたあの大きな部屋「お遊戯室」でピアノに合わせて歌ったり、遊戯をしたり、楽しい日が多かった。

「お遊戯室」のそばには藤棚があって、花の咲いた後には、細長い実がぶら下がるのを初めて知った。また、お庭の後ろは、高台になっていて、そこには、「お化けイチョウ」と呼ばれる大きなイチョウの木があった。天狗が住んでいるなどと言われると、本当かと思うほど大きな木だったが、秋になるとたくさんの実が落ちた。触るとかぶれると注意され、私たちは触らなかったが、先生方は、臭いその実を拾って水に漬け、銀杏にしてくださった。その銀杏を顔にして、色紙で衣装を作り雛人形を作ったりもした。楽しい日々が続いていた。

ある日のこと、皆が「お遊戯室」に集められた。そして、先生が「幼稚園の近くで天然痘に罹った人がいますので、これから皆さんに種痘をします。腕に少し傷をつけるだけで、痛くありませんからね」とおっしゃった。私はドキッとしたけれど、我慢して皆とお医者様の前に並んだ。だんだん自分の順番が近づくにつれ、恐怖心が募ってきて、いよいよ自分の番になった時、種痘は嫌だと泣き出した。家に電話がかけられ、母がとんで来ることになった。その時、「さあ、泣かないで男の子でしょう」と言いながら私を抱きしめたのが及川ふみ先生だった。私の記憶違いでなければ、当時、先生は幼稚園の副主事でいらしたと思うが、威厳に満ちた近寄りがたいところのある先

生だった。その及川先生に抱きしめられてしまうと、初めはじたばたしていた私は、気が静まって恐怖心が薄れてしまった。そして先生に抱かれたまま種痘を受けた。あわててやってきた母が幼稚園に着いた時は、騒ぎがおさまっていた。

泣いたり笑ったりして通ったあの幼稚園の日々は、いま一冊のアルバムになっている。当時のアルバムがみなそうであったように、黒い厚紙でできた台紙には、美しい筆跡の白い文字で「賀陽宮殿下　御成」昭十七・六・廿九とか、「お池の前で（入園当初）」昭十七・五・廿二とか、「久米川農園遠足」昭十七・十二、また、「お雛まつり」昭十八・三・三、「防空訓練」昭十八・七・十五などと書かれている。写真には、倉橋先生、上遠先生、及川先生、そして何人かの教生の先生が一緒に写っていらっしゃる。私のかいた絵や、はり絵も貼ってある。懐かしい日々の記録だ。そしてアルバムの最初のページに「後の日のために」という倉橋先生がお書きになった前書がある。

後の日のために

わたくしたちが　大きくなる日には、日本ももっと大きくなってゐます。—かういって皆さんが歌ってゐるのを聞く度に、先生の心は喜びでいっぱいになります。ほんとうに　そうなんですよ。ほんとうに、そうなんですね。

皆さんの二年間の幼稚園は、いつもの幼稚園ではありませんでした。通園の途もらくでありませんでした。お母さま方のお心づかひも容易でありませんでした。防空服で往復されたことも幾度もありましたね。送り迎へをして下さる

お母さま方も。

それでもよく登園されました。そうして　いつも楽しく遊ばれました。先生も皆さんと始終楽しく遊びましたね。――わたくしたちが大きくなる日には、日本ももっと大きくなってゐます。――皆さんの、あの歌に、いっぱいに声をあわせながら。

後の日、即ちその日のために、この記念帖をつくって下さった先生に代って、短い前がきを書きつけて置きます。

昭和十九年三月

幼稚園主事室にて

倉　橋　惣　三

東京が空襲で焼ける直前、戦争の悲劇が日本全土を覆う時代が始まっていた。幼い私たち園児を目になさりながら、先生は大人が感ずる暗闇の向こうに、園児たちの成長とともに明るい未来を見つけようとなさっていたのだという気がする。

およそ六十年前に幼稚園に通っていた私たちは、いつか大きくなって、子どもを幼稚園に送り、やがて孫も幼稚園児になるほどの年になった。

懐かしい幼稚園のアルバムを開くたびに、倉橋先生の「後の日のために」を読み返す。私たちの世代は、あの倉橋先生が見つめていらっしゃった明るい時代をつくってきたのだろうか。今は亡き先生に伺ってみたい。

（冨山房）

☆このシリーズは、今回で終了いたします。